

氏名（本籍）	赤 嶺 陽 子	（沖縄県）
学位の種類	博士（医学）	
学位授与番号	甲第1178号	
学位授与日付	令和3年12月15日	
学位授与要件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	Physicians' perceptions of followership in resuscitation in Japan and the USA: a qualitative study	
審査委員	（主査）教授	小倉 真治
	（副査）教授	永田 知里                      教授 塩入 俊樹

## 論文内容の要旨

### 【背景・目的】

蘇生トレーニングは、世界的に見ても医療従事者の教育の標準的な要素となっている。先行研究では、ダイナミックな医療チームにおいて、リーダーシップ、コミュニケーション、役割分担、状況認識が重要な要素とされ、蘇生トレーニングでは伝統的にリーダーシップが強調されてきた。2015年の欧州蘇生協議会の蘇生ガイドラインでは、蘇生教育においてリーダーシップのトレーニングだけでなく、フォロワーシップのトレーニングも必要であるとしている。しかし、蘇生チームにおけるフォロワーシップを明確に記述した研究はなかった。

本研究の目的は、経験豊富な医師が好ましいと考える蘇生チームにおけるフォロワーシップの具体的要素とは何か、2つの異なる国籍：日本と米国の医師の共通認識を探ることを目的とした。

### 【対象・方法】

本研究は、2つの異なる国の医師が、蘇生術における好ましいフォロワーシップをどのように認識しているかを探ることを目的とし、救急または集中治療に従事する医師経験年数6年以上の日米医師18名（日本人9名、米国人9名、男10名、女8名、年齢：30歳代5名、40歳代10名、50歳代3名、大学病院8名、三次医療機関4名、三次小児専門病院6名、救急専門医（小児含む）7名、集中治療専門医（小児、新生児含む）11名）を対象に、対面式半構造インタビューを行った。インタビューの質問は、先行研究を参考に「最も良かった蘇生チームの経験の詳細」と「最も悪かった蘇生チームの経験の詳細」を聞き取り、録音し、逐語録を作成した。2人の研究者が独立して主題分析を行い、帰納的主題分析を採用し、研究チーム全体による理論的解釈を行った。すべてのデータを帰納的に分析した。本研究では、Kelleyのフォロワーシップ理論に基づき、「フォロワーシップとは、リーダーを除くチームメンバーの能力、スキル、知識、行動、態度、行動である」と定義した。さらに、能力、スキル、知識をテクニカルスキルと定義し、行動、態度、振る舞いをノンテクニカルスキルと定義し、その枠組みを用いて抽出された主題をカテゴリー分類した。

### 【結果】

初めの14人（日本人7人、米国人7人）ですべての主題と副主題のうち80%が理論的飽和に至ったと判断されたため、18人のインタビューで終了とした。テクニカルスキルにおいて2つの主題：「蘇生の知識」、「蘇生に必要な手技・処置」が抽出された。さらに3つの副主題：「蘇生のガイドライン・アルゴリズムを理解している」、「患者の臨床的経過が理解できる」、「手技・処置を独立して行える」が抽出された。ノンテクニカルスキルにおいて、3つの主題：「役割分担」、「チーム・コミュニケーション

ョン」,「ヒエラルキー」が抽出された。さらに,6つの副主題:「自発的に役割を探し,これを担う」,「落ち着いた口調」,「情報の共有を自ら行う」,「クローズド・ループ・コミュニケーション」,「相手を尊重する態度」,「声を上げる」が抽出された。

### 【考察】

本研究は,日本と米国の蘇生専門家にインタビューを行い,蘇生術チームに特有の好ましいフォロワーシップ属性を探る初めての研究である。

蘇生シミュレーション教育では,伝統的にリーダーシップに重点を置かれ,シミュレーション教育においてリーダーに求められる行動目標はすでに妥当性が確認された評価表を用いて評価されている。しかしながら,フォロワーシップについては評価表を作成できるほどの理論的背景が乏しく,妥当性のある評価表を作成するに至っていない。蘇生教育は,研修医や新人看護師に行われるため,実臨床でリーダーの役割を担うことはない。これらの対象に対して,リーダーシップよりもフォロワーシップを評価してフィードバックを与え,学びを深める方が,より現実との関連性が強く,学びが活きると考えられる。例えば,多くの参加者は,模範的な蘇生チームでは,メンバーは(リーダーに指示されなくても)「自発的に役割を探して,それを担う」という行動が見られると答えた。現在の蘇生教育では,リーダーシップに重点を置くため,「メンバーの役割分担をリーダーが指示する」という教育が行われており,本研究の参加者が好ましいと考えている蘇生チームの在り方とは乖離していた。実臨床と教育が乖離しているということは大きな発見であり,蘇生教育を再構築する必要性が示唆された。

多くの参加者が蘇生チームのヒエラルキーに関して体験を語った。医療者間には暗黙のヒエラルキーが存在し,それは文化が異なっても共通していた。ストレスがかかる緊急・蘇生チームにおいて模範的とされるのは,「相手を尊重する態度」と「声を上げる」という行動であることが明らかになった。特に「声を上げる」という行動は患者安全に重要と捉えられていた。蘇生がうまくいかない時,予測以外の事態が起こった時に,ヒエラルキーを超えて声を上げ,様々な提案をするということは実際には難しい,という内容は特に複数の日本人参加者が語った。日本では,職種や年齢でヒエラルキーの「下」とみなされる者が「上」とみなされる者に対して,意見や提案をすることが米国に比較して困難であると捉えられている文化的背景が関与していると思われた。

### 【結論】

本研究では,日米医師の蘇生チームにおける,好ましいフォロワーシップの具体的要素が明らかになった。本研究の結果は,フォロワーシップに重点を置いた蘇生教育の再構築に寄与すると考えられた。

### 論文審査の結果の要旨

申請者 赤嶺陽子は,蘇生チームにおけるフォロワーシップの具体的要素を質的に分析し,明らかにした。蘇生教育においてフォロワーシップの教育が重要であることを示し,この教育を行うことが,指導者やインストラクター養成にも資することを示唆した。本研究の成果は,将来の蘇生教育と医学教育学の発展に少なからず寄与するものと認める。

---

[主論文公表誌]

Yoko Akamine, Rintaro Imafuku, Takuya Saiki, Jannet Lee-Jayaram, Benjamin W Berg, Yasuyuki Suzuki  
Physicians' perceptions of followership in resuscitation in Japan and the USA: a qualitative study. *BMJ Open* 2021;**11**:e047860. doi: 10.1136/bmjopen-2020-047860